

# 社会情報調査の方法に関する研究会について

井上 芳保

社会情報学部では、1993年度より「社会情報調査の方法に関する研究会」がスタートした。これは「社会情報調査」という全く新しい学問の方法についていろいろな角度から検討しているとする研究会である。1993年度は、学外から若手研究者を招いて二回の研究会を開催できた。すなわち、第1回は、6月4日に大石裕氏（関西大学）を招き「地域情報化研究の課題」というテーマで、第2回は、7月29日に好井裕明氏（広島修道大学）を招き「意味と社会システム」というテーマでそれぞれ行われた。

両研究会のお知らせは「北海道社会学会ニュースレター」に載り、学内だけでなく北海道大学など他大学の社会学研究者の参加も得られた。内容的に充実した非常に意義深い研究会となったといえる。この研究会が、毎夏恒例となった本学部主催の「社会と情報に関するシンポジウム」ともども北海道地区の社会学研究の活性化に寄与するものとなったことを喜んでいる。また、この企画の実施にあたっては田中一学部長はじめ学部の皆さんにたいへんお世話になった。そのことについてこの場を借りて深くお礼申し上げたい。

\*

\*

さて、そのうち、好井裕明氏を招いて行われた第2回の研究会において中心的検討課題となった「エスノメソドロロジーの必要性と可能性」に関わる論稿二点を今回、今年度のこの研究会の成果として、本誌に掲載することとなった。

一つは好井裕明「螺旋運動としてのエスノメソドロロジー——“生きられたフィールドワーク”のラディカルな方法として」である。好井氏は言うまでもなく、わが国におけるエスノメソドロロジー研究の第一人者であるが、研究会当日は「エスノメソドロロジー、そして会話分析」というレジュメに則して話して下さった。これはエスノメソドロロジーを全く知らない人間にもわかるようにという当方からの要望に応じてのことであった。実際、好井氏は参加者からの初歩的な見当違いの質問に対しても一つ一つていねいに応答して下さった。その誠実さに深く敬意を表したい。当初は、研究会での報告内容に多少手を加えたものを原稿にさせていただければ、と好井氏に寄稿をお願いしたのだが、たいへん興味深い力作を新たに書き下ろして寄せて下さった。

この論文で好井氏はメルヴィン・ポルナーの場合にはエスノメソドロロジーにとって重要な「リフレキシビティ」概念に二つの種類のものであった点に着目し、「自己言及的なラディカルリフレキシビティ」(referential radical reflexivity)の見直しを強く要請している。ここにはエスノメソドロジストの立脚点そのものを問おうとするラディカルな問題提起が含まれている。ともすれば「透明人間」になりがちな調査主体自体の「驚き」や「不安」や「ゆらぎ」の誘発こそ、エスノメソドロロジー本来の魅力であり、その意味においてエスノメソドロロジーとは一つの限りなき螺旋運動であるという。

初期エスノメソドロロジーにはこのラディカルさが備わっていたのに、会話トランスクリプト、ビデオトランスクリプトなどの技法に埋没している最近のエスノメソドロジストはそれを忘却し「安定した自分の隠れ場所」を確保しているのではないかと好井氏は鋭く指摘している。これは現実の差別問題の中に身をおき、まさしく螺旋運動の渦中で仕事をしておられる好井氏ならではの問題提起であろう。我々が「社会情報調査の方法」を考えると、この論文から受け止めなければならないものはたいへん多いと思われる。このようなエスノメソドロロジー研究において理論的に最前線に位置するといえる刺激的な論稿を本誌のために寄せて下さったことを深く感謝したい。また、エスノメソドロロジーが好井氏の提唱するラディカルな方法として再生していくことを願ってやまない。

今一つは私の「社会情報学の方法としてのエスノメソドロロジー——或る「調査実習という現象」の考察から」である。これは好井氏に刺激的なお話をしていただいたことに対する主催者側からのお礼の意味を込めてまとめたささやかな論文である。もとより私はエスノメソドロロジーの専門家というわけではないが、目下、社会意識現象に関心を持つ者として、エスノメソドロロジーという方法の魅力にひかれている。そして本論文を書く過程で「社会情報調査の方法」としてのエスノメソドロロジーの有効性についての確信を深めている。ただそれはエスノメソドロロジーが自分自身にも突き刺さってくる痛みを伴う方法ならばこそという条件つきである。私が最後の章で「生成の不確実性に耐える」と表現したことは奇しくも好井氏の言う「自己言及的なラディカルリフレキシビティ」と重なるようである。

今年度は本学部に「社会情報調査実習」という科目が開講されて一年目であり、私自身が試行錯誤しながらこの実習を進めたといえる。その経験のリアルさをそのものとして捉える方法こそがエスノメソドロロジーなのだ気づいたとき、本論文の構想はまとまった。今回我々の前に立ち現れた「調査実習」そのものを、私自身も含めた一つの現象と捉え、そこで実際に起こった「ありのまま」をできるだけ淡々と振り返ってみたつもりである。一緒にフィールドワークを行った学生諸君が読んでくれるであろうことを意識して書いた部分もある。甚だ不十分な内容であり、どれくらいエスノメソドロロジーという宿題をこなし切れたか定かではないが、これは今の時点での私なりの総括であるといえる。

なお、「情報資本主義における社会情報学の課題」なる一章を設けて触れたように、情報資本主義という外的状況が現代日本社会にはあり、取り組まねばならない現代的課題は多い。社会情報学(部)はそれに応えうる内実を備えていかねばならないだろう。その意味合いで今回の拙稿が本学部にとって何らかの参考になるなら幸いである。また「社会情報調査の方法に関する研究会」は今後さらに発展させていきたいものである。一層の御支援をお願いしたい。